

## はは 姑・サツキ②

はは 姑は昭和 30 年頃、同じ集落に住む男性、幸次を婿に迎える。

昭和 31 年 6 月、39 歳の時に長男の幸一を出産。当時は自宅での分娩が一般的だったが、姑は超高齢出産のため会津若松市の病院で出産した。その 2 年半後には長女的美智も生まれ、二人の子供に恵まれた。

幸次は勤め人だったので、幾ばくかの現金収入も得られ、つつましいながらも生活は安定し、姑にとっては幸せのひと時だったことだろう。また、交通事情が悪く教員住宅なども整備されていなかった当時、我が家は小中学校の先生の下宿として何人かを受け入れていた。

昭和 44 年 8 月、集中豪雨により野尻川が氾濫し、流域は甚大な被害を受けた。当時昭和村は稲作の他、葉たばこの栽培も盛んだったが、水田はもちろん、葉たばこのハウスも流されるなど、農地、農作物への被害も大きなものだった。幸次の勤務先は農業共済組合だったため、被害のあった多くの農家への対応など、おそらく多忙を極めたことだろう。また、少しでも時間が出来れば家の農地の復旧にも当たらなくてはならず、体を休める暇も無かったとののではないかと想像に難くない。

そして翌年、幸次は過労により倒れる。まだ働き盛りの 43 歳、入院やリハビリは長期にわたったが、脳出血のため左半身にマヒが残り、仕事に復帰できる目途は立たず退職。民間の生命保険や入院保険などへの加入はまだ普及していなかった時代、生活は困窮を極めていった。

中学 2 年生だった幸一は父に代わって農作業を行い、小学 6 年生の美智は姑が幸次の入院付き添いで不在の間、自分と兄と下宿している先生のために食事を作った。弁当も、だ。

幸次は何とか自身の身の回りの事は出来る程度に回復し退院。姑は幸次の退院後は、農業の傍ら現金収入を得るために、慣れない土方仕事などにも出た事もあったと聞く。とにかく生活していくために必死だったのだろう。

幸一は下宿していた先生方やお世話になった先生方の影響もあり、教員になることが夢だったが、その夢は封印することになった。会津若松市内の高校へ進学したが、経済的理由で地元の定時制高校の農業科に転校。修学旅行は諦めた。

姑は、どんな思いで息子を見守ったのだろうか。息子の夢を誰よりも応援してあげたかっただろうに、夢をあきらめ自分を助けて土を耕す様子を見るのは、身を切られるより辛かったのではないだろうか。

それでも頑張ってくられたのは、色々な人に支えてもらい、多くの人のお世話になったからだと聞いている。

姑は「血の道（血縁者）はだんだん遠くなるが、隣近所は末代までの付き合いだから、大事にしなくてはならない」とよく言っていた。影に日向に、隣近所の皆さんには大変なお世話になったという。

また、姑の友人とそこご主人が営む商店には、お金がないときには随分助けられたそう。支払いを待ってもらったり、時にはお金を貸してもらったこともあったらしい。幸一は今でも「当時のことを思うと、感謝しかない」と言う。その商店は今でも息子さんご夫婦が元気に営んでおられる。

そんなわけで、子供たちが就職するまでの年月は大変な経済的な困窮が続いたようだが、たくさんの方々のおかげで、何とか命をつないでいくことができた。

母の居ぬ厨に立ちて弁当を作る妹まだ十一歳